様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２１３９

研究課題名（和文）仏教絵画における水墨技法の受容に関する比較美術史的研究

研究課題名（英文）A Study on the Method of Ink painting using on Buddhist painting

研究代表者
増記　隆介（MASUKI, RYUSUKE）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：１０７２３３８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、我が国の平安仏画研究をめぐる新たな視点として、中国唐代後半から五代を経て北宋に至る水墨画の成立と展開を視野に収めつつ水墨という技法が仏教絵画にどのように取り入れられ、そのことがどのような新しい表現を生み出したのかについて、五代から北宋にかけての仏教絵画における水墨技法の導入と平安仏画のそれとを比較しながら検討する方法論を提示するものである。そのことによって、平安時代の仏画が従来言われているように当該期の日本人の感性に即した装飾性のみを追求したものではなく、信仰心に基づく多様な表現を希求し、それを具現化したものであることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来、我が国の平安仏画は、彩色の美しさ、截金等を用いた精緻な装飾などから、当該期の人々の祈りをその美麗さに反映した作品群であると理解されてきた。また、水墨技法は、北宋時代をその頂点として主に山水画に用いられ、仏教絵画との関わりは、主に南宋の禅宗人物画等に限って検討されてきた。このような視点は、平安時代の日本絵画が同時代の東アジア絵画の展開からは孤立したものであるという理解によって成り立っており、さらに平安時代が我が国独自の「国風文化」を生み出した時代であるという認識を背景としている。本研究はそのような一般認識を改め、平安絵画が有する東アジア世界での国際性を明らかにしたものである。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the technical interaction between the Ink painting and Buddhist painting from the10th to 12th century China and Japan.Chinese Ink paintings have developed from late the 9th century mainly in landscape painting at last in the 11th century, they realized the real 3 dimension world on 2 dimension canvas.This realistic technique effected on the Buddhist painting in the 11th century China.This tendency made Japanese Heian Buddhist painting take the new mode.

研究分野：美術史

キーワード：仏画　水墨画　平安時代　中唐　五代　北宋　技法

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで我が国の平安から鎌倉時代の仏教絵画を研究対象とし、特に当該期の仏教絵画の様式形成において、唐から宋に至る中国絵画がどのように受容されていたかを継続的に研究してきた。このような個人研究の蓄積と研究代表者もその一翼を担ってきた我が国の仏教絵画を東アジア絵画史の視点から捉えるという近年の研究動向とに基づき、本研究は、中国中唐期の山水画における水墨技法の勃興から北宋におけるその完成へといたる展開が、日中双方の仏教絵画においてどのように受容されたかを作品の調査結果に即して実証的に考察することを目指した。

東洋絵画においては、その基本的な顔料である岩絵具が鉱物の粒子からなり、これを平面的に塗り重ねることを発色の前提とし、粒子の大小や塗り重ねの回数によって濃淡をあらわすという性質を有する。このため微細な濃淡の調整が困難であるのに対し、水の量の多寡によって無限に濃淡の調節が可能な水墨技法は、特に山水という奥行きのある三次元の対象を絵画という二次元の平面に描くに際して、微細な濃淡の使い分けによる立体表現や遠近表現、さらには陰影表現等を可能とした。この唐代と宋代絵画を大きく隔てる水墨技法の確立による三次元のイリュージョン的表現は、熙寧五年（1072）の郭熙「早春図」（台北・故宮博物院）において見事に達成されている。

このような唐宋間における水墨山水画の成立にともなう絵画様式の巨大な転換に類する現象は、当該期の日本絵画史には見出し得ない。本研究は、彼我におけるこの水墨技法形成の有無が、日中双方の仏教絵画の展開にどのような影響を与えたのかを具体的に考察する。

水墨技法の成立による中国絵画の様式転換という視点は、夙に田中一松・米澤嘉圃『水墨美術大系 1　白描画から水墨画への展開』（講談社、1975 年）や戸田禎佑『日本美術の見方-中国との比較による-』（角川書店、1997 年）、小川裕充『臥遊-中国山水画　その世界-』（中央公論美術出版、2008 年）といった中国絵画史研究者による論考には示されているが、このような視点を中国の山水画を離れて、日中双方の仏教絵画に及ぼして実証的に考察した例はない。特に本研究で注目する水墨技法とは、白描図像等を生み出した線描ではなく、面的な濃淡による立体表現のことであり、日本絵画史研究者によって、唐宋間に相当する平安時代の仏教絵画におけるこのような水墨技法受容の様相解明という課題は、これまで全く探求されてこなかった。以上が本研究開始当初の学術的状況である。

２．研究の目的

本研究は、中国唐から宋代にかけて絵画史上の一大転換を領導した水墨技法の成立が、当該期の中国及び日本における彩色の仏教絵画の表現及び様式形成に際して、どのように受容されたかを世界各地に所在する日中双方の作品の詳細な調査、検討を通じて明らかにする東アジア美術研究史上最初の学的試みである。この検討を通じて日中間における水墨技法受容の共通性と差異とを明らかにし、最終的には、その背後にある絵画観及び仏教観のありようについて考察を及ぼす。本研究を通じて、日本絵画の「古典」を形成したとされる平安時代における仏教絵画様式形成の様相を多面的に考察するとともに制作の歴史的状況をも復元的に推察することによって、美術史学の領域にとどまらず、歴史学、宗教史学等に対しても新たな歴史観を提供することを期することを本研究の目的とした。

３．研究の方法

本研究は、中国、台湾、米国、日本各地に散在する唐代から南宋の仏教絵画及び日本国内の平安時代の仏教絵画を調査することを研究計画の出発点とする。その上で、作品を相互に比較、検討し、その技法及び様式上の共通性や差異の背景となる水墨技法摂取の具体相を明らかにする。これを実現する体制については、海外における研究協力者の援助を得て構築済みである。さらには、その学的な進取性を教育の場にも活用すべく、神戸大学大学院学生の協力を得て、調査等を実施した。

４．研究成果

本研究の成果として特筆されるのは、研究期間内において、２０回に及ぶ多種多様な聴衆を対象とする研究報告の場を多く持ったことである。それは、アメリカ、ハンガリー（学会発表⑧、⑨、⑩）、中国等（⑤）の海外も含む研究者、美術史を学ぶ学生、また文化財の所有者や文化財の所在する地域の一般市民（④等）等を含む。このことによって本研究は、美術史学の枠内にとどまらず、研究を通じての国際交流、文化財保護の意識の向上等にも寄与するところとなった。また海外調査に学生を伴うことにより、台湾における国立台湾大学、アメリカにおけるコロンビア大学他の学生たちとの交流の場を得たことは、今後の日本美術史研究が国際的に発信される場を用意する一端を担ったものと確信する。以下、主要な研究業績に基づきながら研究成果の概要を述べる。

雑誌論文②では、従来日本的な美術の完成期とされる１０世紀末から１１世紀の転換期の日

本絵画の様相を、奝然の渡宋とその日中双方への影響いう新たな切り口から具体化したものである。それは、奝然が目にし得たであろう五代から北宋成立期の中国絵画の具体的な様相を近年の考古学的成果などを通じて明らかにするとともに、奝然が北宋皇帝に献上した「倭絵屏風」の存在に着目し、水墨画の興隆期である北宋初期の中国側から見れば古様であり、唐代絵画の余映を強く示す着彩の日本の山水画がどのように受け入れられたかについても検討した。その結果、従来はその存在自体が無視されていたとみられて来た日本絵画が、予想以上に広く影響を与えた可能性があり、具体的には北宋１１世紀における青緑山水図の復活などにも関わる可能性があることを指摘した。これは、従来中国側からの影響のみを論じて来た日本文化史上において、逆に日本の絵画が中国絵画の与えた影響を明らかにしたものである。

また、雑誌論文③においては、絵画の作例がほとんど現存しないものの、平安絵画史を考える上で重要な時代である１０世紀の絵画史的状況について、当該期の絵師の評価に関する資料を渉猟し、主に文献資料から当該期の絵画を概観するという新たな手法を用いた研究である。その結果、従来「和様化」、「日本化」の時代であり、記録に残された絵師たちの画風の変化はそのような「和様化」の傾向を示す、と評価されていた１０世紀絵師の評価に関する資料が、北宋の中国の画史や画論から復元的に推察される、当該期の中国における唐以来の呉道子様式からの脱却という絵画史的状況とパラレルなものであり、我が国独自に展開したものではないこと、より広く東アジアにおける絵画史的展開の一端を示すものであることを明らかにした。

図書①においては、平安時代の日本における絵画史的状況を高麗のそれと比較することにより、北宋との外交関係の濃淡が、絵画史的状況に大きく関与していること、具体的には水墨山水画を含む水墨技法が北宋からもたらされた高麗に対して、日本においては主に仏教的な文物がもたらされたのみであること、逆にこのことが日本における唐代以来の仏教絵画の流れが温存された理由であることなどを明らかにした。

図書③においては、仏教絵画以外の世俗画の世界において中国絵画がどのように受容されたかを国宝「病草紙」と北宋における医学の進展、病者や治療を絵画化する動向との比較により検討したものである。

本研究の中心テーマである仏教絵画における水墨技法の受容の問題については、主に「不動明王二童子像（青不動）」（青蓮院）、「応徳涅槃図」（高野山金剛峰寺）、「普賢菩薩像」（東京国立博物館）について検討を重ね、学会発表③、⑧、⑱として発表した。特に③においては、「応徳涅槃図」に原本とも言える作品が存在した可能性を画中の銘文の解読、中国における涅槃図の資料を渉猟することによって提案し、唐代に呉道子によって描かれた涅槃図が北宋後期に注目され高く評価された状況を明らかにした。そして、その呉道子による涅槃図の図様が「応徳涅槃図」と近似すること、及び「応徳涅槃図」にみられる夜を表現する水墨技法、及び北宋的彩色の双方から「応徳涅槃図」の原本に相当する絵画が北宋において制作された可能性を提示した。⑧、⑱においては、「青不動」の火炎表現における水墨技法が、唐末の蜀の火炎表現の系譜に連なることを明らかにするとともに、特に⑧においては、「普賢菩薩像」の墨による輪郭線が北宋仏画にみられる輪郭表現の受容であるとともに、我が国においては世俗人物の肖像画など、世俗画で用いられる技法が仏画に用いられたものであることを明らかにした。そして、その意味を探求することで、我が国において１２世紀後半の仏画に何が求められたかを検討する端緒を開いたものであり、ここで示された研究方向が、本研究に後続する「平安時代の仏画と世俗画の境界をめぐる比較美術史的研究」へと発展することとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①増記隆介、大徳寺五百羅漢図の母胎としての呉越絵画：日本伝来の白描図像を中心に、九州大学人社系学際融合リサーチハブ形成型研究報告書　徹底討論大徳寺伝来五百羅漢図の作品誌：地域社会からグローバル世界へ、依頼有、2019、pp.33-59.

②増記隆介、奝然が見た唐宋絵画：平安後期絵画史の前提として、グレートブッダシンポジウム報告書、第 15 冊、依頼有、2017、pp.53-67.

③増記隆介、十世紀の画師たち：東アジア絵画史から見た「和様化」の諸相、美術研究、査読有、第 420 号、2016、pp.1-30.

④増記隆介、童子経曼荼羅図（智積院）、国華、査読有、1445 号、2016、pp.53-55.

〔学会発表〕（計 20 件）

①増記隆介、法隆寺金堂壁画と高松塚古墳壁画、佛教大学講座「シルクロード　美の道・壁画の道」、佛教大学四条センター、2018 年 1 月 7 日

②増記隆介、平安末期における「高雄曼荼羅」の模本制作と文覚・明恵、古社寺保存法

の時代展シンポジウム政権と文物の歴史的諸相、京都文化博物館、2019 年 1 月 6 日
③増記隆介、「応徳涅槃図」再考：原本の存在とその絵画史的位置、アジアにおける仏伝表象の諸容態ワークショップ、京都大学人文科学研究所、2018 年 12 月 23 日
④増記隆介、南山観音寺「絹本著色孔雀明王像」の史的位置、特別展覧会明王の美、日本の鬼の交流博物館、2018 年 11 月 28 日
⑤増記隆介、高松塚古墳壁画与唐代絵画、西安外国語大学日本文化経済学院東北亜細亜研究中心系列学術講座、2018 年 10 月 23 日
⑥増記隆介、「五百羅漢図」の母胎としての呉越絵画：日本伝来の白描図像を中心に、徹底討論大徳寺伝来五百羅漢図：地域社会からグローバル世界へ、九州大学、2018 年 6 月 2 日
⑦増記隆介、「平家納経」と『源氏物語』:古典としての藤原道長、国際シンポジウム Frame and Framings in a transdisiplinary perspective Ⅲ（フレームの超域文化学　フレームとしての古典）、日本台湾交流協会台北事務所　2018 年 3 月 25 日
⑧ MASUKI Ryusuke “Underlying the “Vision” of Heian Buddhist painting”, *Movement and Materiality in Japanese Art*, Mary Griggs Burke Center for Japanese Art in Columbia University,10th March 2018
⑨増記隆介、仏眼仏母像をめぐる明恵と空海、国際交流基金ブダペスト事務所主催日本文化講座、国際交流基金ブダペスト事務所（ハンガリー）、2018 年 2 月５日
⑩MASUKI Ryusuke “Colors and Techniques of Buddhist paintings in Heian period”, International workshop of Ph.D. candidate of Japanese studies in Budapest, 4th February 2018
⑪増記隆介、比叡山と法華経絵、つがやま市民教養文化講座、2018 年 1 月 20 日
⑫増記隆介、孔雀明王造像の展開：唐・宋・日本、日本仏教綜合研究学会、東京大学史料編纂所、2017 年 7 月 30 日
⑬増記隆介、日本美術と中国美術、白鶴美術館、2017 年 4 月 30 日
⑭増記隆介、平安時代の仏画制作とその修理、日本の表装連続講演会、京都大学総合博物館、2017 年 2 月 11 日
⑮増記隆介、法隆寺金堂壁画と高松塚古墳壁画：唐代絵画受容の視点から、法隆寺金堂壁画シンポジウム法隆寺金堂壁画はなぜ世界の至宝か、有楽町朝日ホール、2016 年 12 月 3 日
⑯増記隆介、奫然が見た唐宋絵画：平安後期絵画史の前提として、グレートブッダシンポジウム日宋交流期の東大寺：奫然上人一千年大遠忌にちなんで、東大寺、2016 年 11 月 27 日
⑰増記隆介、呉越国の絵画と日本、呉越国−西湖が育んだ文化の精粋−展記念講演会、大和文華館、2016 年 10 月 30 日
⑱増記隆介、青蓮院「不動明王二童子像（青不動）」与唐宋絵画：従風格史的看点、交流与伝播国際学術研討会、国立台南芸術大学、2015 年 11 月 6 日
⑲増記隆介、十世紀の画師たち：東アジア絵画史から見た「和様化」の諸相、東京文化財研究所オープンレクチャー、東京文化財研究所、2015 年 10 月 30 日
⑳増記隆介、装飾経における「見立て」:「久能寺経」と「平家納経」を中心に、神戸大学北京外国語大学学術連携拠点設立記念シンポジウム、神戸大学人文学研究科、2015 年 7 月 18 日

〔図書〕（計 3 件）
①増記隆介,他、アジア仏教美術史論集東アジアⅥ 朝鮮半島、中央公論美術出版、2018 年、担当 pp. 449-476.
②増記隆介,他、天皇の美術史１古代国家と仏教美術、吉川弘文館、2018 年、担当 pp.7-97.
③増記隆介,他、病草紙、中央公論美術出版、2017 年、担当 pp.201-214.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。